

日中間の漢語教育の連繋に向けて

国際センター 藤田 益子

1. はじめに

全学教育科目として前期に開講している「中国留学準備講座Ⅰ・Ⅱ」は、主に大学の夏期休業等の期間を利用した短期留学を照準とし、更には一年以上の長期留学を目指す学生にも対応できるよう組まれた講義である。本学では、従来、法学部や工学部等、一部の学部で、長年にわたって中国でのサマーセミナーを行ってきた実績がある。そこで、全学の学生に門戸を開くことを目的として、2006年から国際センターでは、新潟大学間交流協定締結校である清華（せいけい）大学の主催による北京サマーセミナー「夏期集中・中国語コース」を協賛することとなった。それに伴い現地での本学学生に対する授業に関して、国際センターで授業内容の精査を行なうこととし、教育面での関与をして行くことになった。以下、その概要と、精査の経緯、結果をまとめる。

2. 清華大学サマーセミナーについて

サマーセミナーを主催する清華大学は、北京大学と双壁をなす中国の最重点大学であり、中国では最も古い歴史を持つ大学の一つである。新潟大学とは、2000年3月、大学間交流協定を締結している。なかでも、清華大学人文社会科学学院は、新潟大学法学部と学術交流協定を結び、過去10年間新潟大学法学部と協力して、「新潟大学サマースクール」を実施してきた。これまでの12年間に、このセミナーに参加した新潟大学の学生は250名を超え、経験豊かなスタッフによって高い成果を上げている。北京大学や清華大学といった名門大学に1年以上の留学をした学生の大半が、1、2年生の時にこのセミナーに参加している。

今年度からは、更に全学の学生諸君の要望に応え、新潟大学の全学部の学生が応募できるよう対象を拡大した。新潟大学の学生であり、所定の条件を満たせば、誰でも応募は可能である。

3. 実施期間

2006年8月4日～9月3日

4. 募集要件

新潟大学の学生を対象に募集する。

5. 応募のコース概要と目的

国際社会において、日増しに国際言語としての重要性を高めつつある中国語。その中国語によるコミュニケーション能力を高めることを目的としている。このコースは北京にある清華大学人文社会科学学院が、長年にわたる新潟大学の受入実績にもとづいて、新潟大学の学生のために開くものである。コースの講義は各クラス担当の中国人スタッフによって、ダイレクト・メソッド（＝日本語を一切使わない）で行われる。

最大の目的は、短期的・集中的に中国語力を向上させることにあり、中国語漬けのプログラムを用意している。毎週30時間、4週間で合計120時間のスケジュールは、大学の教養科目として第2外国語を1年間勉強する時間数に匹敵し、その効果は明らかである。そのため、このセミナーに複数回に渡って参加する学生も少なくない。また、一年以上の中国留学をする学生の大半が、このセミナーに参加した者であることも事実である。これは、授業の効果も当然のことながら、この留学経験によりモチベーションが向上し、具体的な学習目標が定まることも要因の一つと考えられる。

授業内容については、新潟大学国際センターの中国語の専門教員によるチェックが行なわれており、修了試験にも携わった。

6. 課外活動・旅行等

日曜日は原則として自由行動である。文化史跡の宝庫である古都北京は、現代中国の首都北京の発展の様子を肌で感じることもできる。宿舎に残って勉強したり、キャンパスで中国の学生や知識人たちとの語らいに挑戦することも可能である。

毎土曜日には、課外学習の一環として、故宮、万里の長城、盧溝橋、宋慶齡記念館など歴史的な理解に必要な史跡への研修も行なった。また、更に最後の週には歴史文化理解を深めるための現地研修旅行を実施した。

7. 宿泊施設と生活環境

清華大学の留学生寮に宿泊した。2人で1部屋が原則であるが、今年は特に清華大学の計らいで、本学の学生にのみ特別に個室が割り当てられた。各部屋には、バス・トイレ、テレビ、電話、エアコンなどが付いている。また、生活用品は、宿舎内の売店か、大学内の

大型スーパーで購入が可能である。郵便局も大学内にあるので、基本的な生活上の支障は全く見られなかった。

8. 費用

清華大学関係者・新潟大学教員・旅行社による説明会を実施した。参加希望者へは、費用等についてその際紹介した。

9. 講義内容

1 週間のスケジュール

	月	火	水	木	金	土	日
1 時限	口語	聴力	口語	聴力	口語	史跡参観等 例：故宮、	
2 時限	口語	聴力	口語	聴力	口語		
3 時限	口語	聴力	口語	聴力	口語		
4 時限	口語	聴力	口語	聴力	口語		
5 時限	聴力	口語	聴力	口語	聴力		
6 時限	聴力	口語	聴力	口語	聴力		

口語：会話を中心とした授業（文法事項も含む）

聴力：ヒアリングを中心とした授業

10. クラスとテキスト

能力別のクラス編成を行い、各クラス10名を越えないように配慮してある。今年度は、初級と中級の2クラスが設置された。初級のクラスは、新1年生を対象にしており、4月に入学した1年生が、大学の講義で3ヶ月中国語を勉強したレベルにあわせている。使用しているテキストは、中国で編集されたものであり、日本語による解説はない。

11. 授業内容について

初級、中級の二班に分かれ、初級レベルは、A班とし10名、中級レベルは、B班とし6名で構成した。

担当は、初級が劉先生、馬先生

中級が張先生、鄭先生であった。

内容は、発音練習、ヒアリング、文法、読解などで、テキストに添って進められた。

12. 問題点

以下、授業における問題点の具体例

[A班]

- (1) 教員によっては、意識的に口の形を学生に見せる意識が薄い場合がある。
- (2) 学生の口の形に注意を払っていない場合がある。
- (3) 教材のテープを使用する場面があった。
- (4) 教室での指示が、特に1年生には伝わっていないことがあった。
- (5) 学生側に教室での基本用語に慣れていない者がいた。例：
 - ①请跟我读。（私の後について読んでください）
 - ②大家一起读。（皆さん一緒に読みましょう）
 - ③听懂了吗？（聞き取れたか？）
 - ④听明白了吗？（聞いて分かったか？）
 - ⑤请把书翻到第一页。（一ページを開いてください）
 - ⑥请在说一遍。（もう一度言ってください）
 - ⑦有问题吗？（質問はありますか？）
 - ⑧请大点儿声儿。（もう少し大きな声でお願いします）

[B班]

- (1) 抽象的な概念を伴う文法事項について、1、2年生の段階で中国語によるダイレクトメソッドで教えるのには、学生のレベルから見て困難である。
例：可能補語“V+不住”（忍不住）、“V+不上”（赶不上）等。
“赶不上”に関しては、イコール“来不及”という例を用いた解説がなされたが、いずれも方向補語を含んだ用例であり、更なる混乱を招く結果となっていた。“忍不住”に至っては、ほぼ理解不能な様子であった。

- (2) 特に日本人が不得意な発音に対する理解不足が見られた。

例：-nと-ngの発音の区別に苦しむ学生がいた。日本の教室では判別しやすいよう、誇張して指導を行なうため、ネイティブの自然な発音に慣れていないことが原因と推測される。例えば、「招聘 zhāopìn」（特に日本語の音読みを利用して区別を導き出しにくい「招聘」の「聘」などの例が出て混乱していた）

- (3) 学生側の文法力が、クラスのレベルにそぐわない者がいた。しかし、現況の本学の履修時間数から鑑みて、一概に一部の学生の不勉強のせいとは言いきれない。なぜなら、学部によって、中国語の履修時間や学習の方法が異なっているからである。

13. 学生からの要望

- (1) 発音を個人的にもっと見て欲しい。
- (2) 漢字だけでなくピンインを全部にふって欲しい。

- (3) テープは余り使わないで欲しい。
- (4) 話す言葉を単語だけでなく、全て板書して欲しい。
- (5) 新出単語以外に、新しい事項を解説する場合は、プリントが欲しい。

14. 清華大学側の対応

以上のような問題点を逐次、清華大学の本学担当教員に連絡した結果、即日教室での改善が見られ、学生からも、現地での教員の対処に努力が見られるとの反響があった。

15. 授業介入によるメリット

このような講義への関与に際し、得られたメリットには次のようなものが挙げられる。

- (1) 協定校の教育組織に緊張感を与える結果となった。これにより、日々の緊密な連携と情報交換、更には、サマーセミナー実施中に教員同士で模擬授業を行なうなど、講義内容と形式の改善のために、大いに努力と配慮がなされた。
- (2) 特に初期の段階で、本学の教員が授業に介入することで、学生がスムーズに中国での講義形式に入っていく事ができた。
- (3) 双方の了解を得て、本学の教員が講義に参加することで、学生のフォローがしやすくなった。

16. 授業介入によるデメリット

デメリットとしては、協定校の教育組織や担当教員に対して、大きなプレッシャーを与える結果となった。日々の問題点の改善や本学側からの授業チェックに対応するため、全ての授業に対して、決め細やかな気配りと、教員の総括的なレベルの向上に、連日ミーティングを行い反省点を批判し合うなどの大変な努力

と負担が強いられたものと思われる。

17. 今後の課題

- (1) 協定校と本学間での教材面での連携が必要である。
- (2) 日本での中国語教育とダイレクトメソッドによる中国の授業方式の間を埋めるような教育方法の開発が必要である。
- (3) 日本における準備段階での予備教育が重要である。特に、春に行なったHSK受験対策講座に参加した学生が数名参加しており、サマーセミナーにおいて、目覚ましい成長が見られた。このことから日本での予備的な教育が留学での効果を倍増することがはっきりと分かった。今後は、このような留学前の準備教育のあり方について、更なる改善と対策を取る必要性を強く感じた。

18. まとめ

全体を通して、今後も全学の学生に対して、このような支援を行なっていく必要性を確認する結果となった。これは、受け入れ機関である清華大学の中国語教育に大きな影響をもたらしただけでなく、我々新潟大学の教員にとっても今後の教育改革のあり方を考える大きな布石となった。また、学生に対しても、慣れない海外の大学において、困難を感じるような問題点がある場合、その場ですぐに改善されることで、より良い環境で授業を受けることができるよう対処がなされただけでなく、学生自身の学習方法に対しても、日中双方の教員から同時にアドバイスを行なえたことは非常に効果的な指導方法であったと思われる。

こうしたことは、本学における中国語教育において、将来的に考慮すべきいくつかの重要なポイントを示すものであった。